

『ボズの素描集』

(その三)

C. ディケンズ 作

藤本隆康 訳

——情景——

第二章

街頭風景——夜

しかし、最高に素晴らしいロンドンの街頭を見ようとするなら、暗くどんよりのとした陰気な冬の夜が良い。湿気をたっぷりと含んだ霧が静かに忍びおりて、舗道をぬるぬると濡らしてはいるが、不潔な汚れはそのまま洗い清められないでいる。そしてあらゆる物に垂れ込める重苦しく物憂げな霧のため、周囲をおおう暗闇の中にくっきりと浮かぶガス灯はいっそう明るさを増し、あかあかと明りのついた店はひとときわ輝いて見える。こんな夜には、家庭にいる人はみな精々ゆったりとくつろぎたいと望んでいるように見えるし、戸外を歩く人は、わが家の炉端に座る幸運な人たちのことを格別羨しく思うのである。

もっと大きくてきれいな通りでは、茶ダイニング・バーの間のカーテンがしっかりと引かれ、台所で焚かれる火が明るく燃え上がり、できたての夕餈ゆうげのおいしそうな湯気が、地下勝手口の柵のそばを疲れた足取りで通る腹を空かせた歩行者の鼻先に漂ってくる。郊外ではマフィンマフィンを売る少年（午後の四時頃、小さな鈴を鳴らしながら、ほかほかの

マフィン^{マフィン}を頭に載せた木の盆に入れて売り歩く呼び売り商人の姿は、当時の風物詩の一つだった。マフィン^{マフィン}は、お茶の時間や朝食にでき立てをバターをつけて食べる丸くて小さな軽焼^{マフィン}が、小さな通りをいつもよりはずっとゆっくりと鈴を鳴らして歩いて行く。それと言うのも、四番地のマクリン夫人が小さな表口を開け、甲高い声を張り上げて「マフィン！」と呼んで呼び止めるかと思うと、五番地のウォーカー夫人が居間の窓から顔を出してさらに「マフィン！」と叫ぶからである。そしてウォーカー夫人が叫び終らないうちに、向かいのペプロウ夫人の坊やが母親の手を離れて、バターを塗ったマフィンが食べられるというとき以外には見せたことのない速さで通りを駆け出して行くが、それをまた母親が必死に引き戻そうとする。それを見ると、マクリン夫人もウォーカー夫人も坊やの難儀を省いてやり、同時にペプロウ夫人に近所のよしみで一こと二こと言葉をかけるために走って道を渡り、ペプロウ夫人の玄関先でマフィンを買う。その時、ウォーカー夫人が自ら進んで述べるところによると、「湯沸かしのお湯が良い具合に沸いたところで、お茶わんの用意もできていて、外はこんなにひどい晩だから心を和めてくれるあったかいお茶をいただくことにしたようである——まれに見る偶然から、他の二人の婦人も同時に同じ気持ちになっていた。

男の子ったら悪戯をして困りますわね、でもペプロウの坊ちゃんは他の子と違って可愛らしいわといった余談を交えながら、いやな天気のこととかお茶の楽しさなどを少しばかり語り合っていると、ウォーカー夫人が通りをやって来る夫の姿を目にする。そして、夫はきとお茶を欲しがりますわ、かわいそうに船渠^{ドック}からぬかるんだ道を歩いて帰って来たのですもの、と言って彼女はマフィン^{マフィン}を手に持って道を渡る。マクリン夫人もそれに倣い、ウォーカー夫人にちょっと言葉をかけて、みんなそそくさとそれぞれの小さな家にもどり、小さな表戸をばたんと閉める。表戸はその夜は二度と開けられることはないが、ただ九時に盆の前に角灯をつけたビール売りが回って来て、ウォーカー夫人に「きのうのタイザー（『モーニング・アドヴァタイザー』紙のこと。1794年に創刊された酒類の販売免許を受けている飲食店主^{店主}）」を貸し与えながら、こんなに寒くっちゃビールびんも持てやしないし、新聞もめくれないや、あの煉瓦工場^{煉瓦工場}で男が凍死した夜は別だが、

こんなにひどい寒さは初めてだよ、と言う。

街角の巡査と、おそらく天気が変わって厳しい霜がおりるのではないかという予言めいた会話を少しばかり交わした後、この九時のビール売りは親方の店にもどり、その夜は酒場の炉火をせっせと掻き立てたり、そのまわりに集まっているお歴々の会話にうやうやしく加わったりして過すのである。

こんな夜には、マーシュ・ゲイト（ランベス・マーシュは19世紀の始め頃は、テムズ川の高潮によってしばしば浸された湿地帯であった。マーシュ・ゲイトはウオータールー橋付近を指している。）やヴィクトリア劇場（コウバーク劇場という名で1817年に建てられたが、1833年ヴィクトリア劇場となり、後にオールド・ヴィックという俗称で親しまれるようになる。現在はシェイクスピアの劇やオペラを上演している。）付近の通りは不快な汚れを呈してくる。そして、この界わいを群れをなしてぶらつく人たちによって、その汚れはいっそう助長されるのである。色とりどりのいくつかのランプが上に華やかに飾られた焼きポテトを祭る小さなすずの祭壇にも、いつもの華やかさは見られない。そして腎臓パイ売りの屋台と云えば、その栄光はまったく消え失せている。「人物画」が施され、中が透けて見える油紙製のランプのろうそくを何度も風に吹き消されたパイ売りは、火を貰いに最寄りの酒場に走って行き来するのうんざりして、もう照明はできぬことと諦めている。そしてその「所在」の手がかりとなるのは、熱い腎臓パイをお客に渡すために彼が携帯用の天火を開けるたびにぱっと光る火花だけで、その長い不規則な残光が通りを渦巻くように流れて行くのである。

ひらめや牡蠣^{かき}、そして果物の呼び売り商人たちがお客の気を引こうと空しく努めながら、掘っ建て小屋の店の中を当てどもなくぶらついている。そして通りをいつもはふざけて歩くぼろをまとった少年たちが、軒の突き出た戸口やチーズ屋のズックの日除けの下にうずくまるようにして小さく固って立っている。チーズ屋を覗くと、あかあかと燃えるガス灯が窓ガラスにさえぎられることなく山と積まれた鮮やかな赤や淡黄色のチーズを照らしており、その中には五ペンスの小さな薄汚れたベーコンのかたまりや、さまざまな桶に入った週毎に仕入れられるドーセット産のバター、それに「できたて」と表示されたふんわりとした円筒状のバターも混じって見える。

ここで彼らは、最近ヴィクトリア劇場の半額割引きの天井^{まじき}棧敷で芝居見物をしたことから、芝居を話の種にして毎晩アンコールされるあの恐ろしい決闘を口々にほめそやし、またビル・トンプスンが続げまに二度のとんぼ返りをやるという離れ業をして見せたり、複雑怪奇なホーンパイプ踊り^(ホーンパイプ)の伴奏で踊られる活発な舞踊^(舞踊)を見事にやってのけたといったことを飽きもせず話し続けるのである。

十一時近くになる。長い間しとしとと降っていた冷たい霧雨が、本格的な雨となって街路に注ぎ始める。焼きポテトを売る男はすでに帰ってしまった——腎臓パイ売りも、片腕に丸ごと「店」をのせて歩き去ったところである——チーズ屋は日除けを下ろし、少年たちも退散した。でこぼこの滑りやすい舗道にいつまでも聞こえるカタカタと鳴るパトン^(泥道を歩くときに靴や長靴に付ける輪状の金属。)の音や、風が店の窓に吹きつけるとかさかさ^(かさかさ)と鳴る雨除けの音が、この夜の悪天候を物語っている。防水ケープをボタンできっちりと留めて身体に巻きつけるようにした巡査が街角に佇み、帽子を手でしっかりと押さえて吹きつけてくる突風や雨を何とか避けようと身体をくねらせている。それは、前途を楽観している様子にはとても見えない。

一クォータン^($\frac{4}{16}$ ポンド。)分の砂糖とか二分の一オンス^($\frac{1}{16}$ ポンド。)のコーヒーを求めるけちくさい客が鳴らすだけの、悲しげな音色を立てる壊れた鐘を扉の裏につけた小さな雑貨店が、店を閉めかけている。日がな一日、あちこちと行き交っていた人波は急速に退きつつある。そして居酒屋から漏れ聞こえる騒がしい喚声や口論が、夜半のうら悲しい静寂を破るほとんど唯一の音になる。

またどこかで音が聞こえるが、それも止む。哀れな女が腕に抱いた幼児のやせ細った身体に、すり切れた貧弱な肩掛けをいねいに巻きつけて、情け深い通行人からわずかでも絞り取ろうと衆知の民謡を歌って聞かせようとしている。しかし、弱々しい声をあげる女に与えられるものといえば、ただ無情な嘲笑だけである。青ざめた女の顔を涙がしとどに流れ落ちる。幼児はおなかを空かせて寒さに震えており、その低い息の詰まるようなむせび泣きを

聞くと哀れな母親はいっそうみじめな気持ちになり、大きな呻き声をあげ、絶望して冷たく濡れた戸口の上り段に崩れるように座り込む。

歌！このようなみじめな女とすれ違って、いったいどれほどの人が歌おうとするだけで生じるその女の苦悶、そして失意に沈む心を思いやることであろうか。愚かにも悲しい心苦！人が陽気に浮かれ騒ぐときには賑わいを添えてくれるあの喜びの歌の文句を、病み、誰からも省みられず、飢えに苦しみながらこの女がどれほど幾たびかその弱々しい口から漏らしてきたかは、神のみの知ることである。この女を笑うことは許されない。その弱々しく震える声は、恐ろしい窮乏と飢餓を切々と訴えかけているのだ。この賑やかな歌をか細い声で歌うこの女の行く手には、寒さと飢えによる死が待っているだけなのである。

一時！あちこちの劇場から家路につく人たちが、ぬかるんだ道連れ立って歩いて行く。辻馬車、貸馬車、四輪自家用馬車そして劇場専用の乗合馬車が、がらがらと音を立てて走り過ぎる。手に薄ぼんやりと光る汚れた角灯を持ち、胸に大きな真鍮の鑑札（馬車の営業所で馬に水を与える免許を受けた人が身につけるのを義務づけられているもの。）をつけて二時間ばかりも叫んだり走り回っていた水飼いの男たちが、それぞれ行きつけの酒場に帰り、パイプや熱いビールで肉体の疲れをいやす。平土間の常連も仕切り席の常連も、それぞれに相応した食堂に群れをなして向かう。そして厚切りの肉、腎臓、うさぎ肉、牡蠣、黒ビール、葉巻そして数限りない飲食物が、紫煙が立ちのぼり、人が走り、ナイフがカチャカチャ音を立て、給仕がしゃべり立てるといった、まったく言語を絶する混乱と騒音の中で客に出される。

芝居見物の人たちの中でさらに音楽の好きなものは、どこかの音楽の集いに足を向ける。好奇心につられて、しばらくはその人たちのお伴をしてみよう。

天井の高い広々とした部屋に、八十人から百人ほどの人が座っていて、まるで誰もが靴職人であるかのように、テーブルの上のしろめのますをナイフの柄でこつこつとしきりにたたいている。中央のテーブルの上座に座る三人

の「くろうと歌手」が歌い終わったばかりの合唱曲に、みんなで喝采を送っているところなのである。この三人のうちの一人在進行役をつとめている——緑色の外套の襟からすぐ禿頭が突き出ているといった感じの小柄で尊大な男である。他の二人はその男の両脇に座っている——大きな身体から小さな声を出す男と、黒い服を着たほっそりとして浅黒い顔の男である。進行役の小柄な男は実に愉快的な人物である——自らの威光を人に振りまくあの実に恩着せがましい態度！それに何という声！

「何という低音だ！」青い襟飾りをつけた若い紳士が力をこめて連れに言う、「大変な低音だ！まったく、あんなに低い音を出す者はいないぜ。あんまり低くて、時には聞き取れないくらいだ。」その通りである。彼が呻くような声を出して、もとに戻れなくなるまで少しずつ音を下げていくのを聞くのは、実に愉快である。そして彼が、「高^{ハイランド}地は我が心」(スコットランドの詩人ロバート・バーンズの詩による有)とか「雄々しき老ホーク」(当時の流行歌で、作詞は有名なスコットランド民謡。H. F. チョーリー、作曲はE. J.)といった歌を魂を注いで感銘深く厳かに歌うのを見ていると感極まってくる。身体の大きな男がまた感情をたっぷりこめて、「我とともに飛べよかしヘシィ」(トマス・ムアの詩による恋唄。)といった歌を女のように甘ったるく、実に魅惑的な調子で歌うのである。

「みなさん御注文を——御注文をどうぞ——と赤毛の青白い顔をした給仕が言う。そして、ジン「一杯」、ブランデー「一杯」、黒ビールパイント、そして特別甘い葉巻といった注文が、部屋の至るところから大声で出される。「くろうと歌手」は榮譽の極みにあり、実に物柔かいもったいぶった態度で恩顧を垂れるようにうなずいて見せたり、馴染みの常連に一こと二こと言葉をかけるのである。

小さな茶色の外套を着て、白いストッキングと靴を履いた小柄で丸顔の男は、コミックな歌が専門である。彼が司会役から指名を受けるとき、彼の態度には卑下する気持ちと自分の能力をひそかに意識する様子とが混ざりあっていて、それがとりわけ愉快的な感じを与える。「みなさん」と小柄で尊大な男が司会用の木づちでテーブルをコツンとひとつ鳴らして言う——「みなさ

ん、御傾聴あれ——我が友人スマギンズ君が歌います。」——「ブラヴォー！」と一同が叫ぶ。スマギンズは協奏曲よろしくかなりの咳払いをし、さらに一、二度実にひょうきんに鼻を鳴らし一座を喜ばせたあと、それぞれの節の終わりに歌詞よりも長い繰り返しフアルテラルをつけてコミック・ソングを歌う。その歌は惜しみない喝采を受ける。そして誰か野心的な歌上手が自ら進んで一曲披露して惨たんたる結果に終わったあと、例の小柄で尊大な男がまたひとつテーブルをたたいて、「各々方、よろしければ合唱をやりましょう」と言う。この言葉に一同はやんやの喝采を送り、さらに元気な連中は、ビールを注ぐグラスの脚を一、二本たたき折って無条件の同意を表明する——これは面白い趣向である。しかし、破損費の請求書に目を通すよう給仕に求められる段になると、しばしばちょっとした悶着が持ち上がるのである。

こうした光景は朝の三時か四時まで続く。そしてそれが幕を閉じても、また新たな情景が物好きな新参者の目に展開していくのである。しかしながら、こうした情景を残らず描こうとすれば、たとえ簡単に述べるにしても一巻の書物が必要となり、それは教訓にはなってもけって面白いものではないと思われるので、ここで頭を下げてこの章の幕とさせていただく。

第三章

店 と 店 子

ロンドンの街は、何と計り知れない瞑想の糧を与えてくれることだろう！北はダンから南はピアシーバまで（パレスチナの北端より南の涯までの意。「創世記」第21章31節および第30章6節、「土師記」第20章1節参照。）旅をすることができながら、至る所が荒地であると言う人を哀れに思ったスターン（ローレンス・スターン、1713—68。イギリスの牧師・小説家。『感傷旅行』第1巻「カレーにて」参照。）にわれわれはけって同意できなかったが、帽子をかぶりステッキを手にしてコヴェント・ガーデンからセント・ポール寺院ひいだいの境内まで歩き、さらにもう一度逆もどりして、その散策から何らかの楽しみ——教訓とまで言いたいところだが

——を引き出し得ない人には、いささかの同情も感じない。しかし、そうした人は現に存在するし、毎日でもお目にかかれるのである。大きな黒い襟巻、明るい色のチョッキ、まっ黒な杖、それに不機嫌な顔つきといったものがこの人種の特徴である。普通の人なら、われわれの傍らをさっさと通り過ぎてしっかりとした足取りで仕事場に向かったり、楽しい目当てがあって元気よく走って行くのに、この連中ときたら、勤務に就いている巡査のようにむっつりと浮かぬ顔をして、だらだらともの憂げに通り過ぎて行くのである。彼らは心に何らの印象も受けないかのようであり、ポーターに突き倒されたり辻馬車にひかれてもしなければ、その平静さは失われることはないのである。天気の良い日には、どの目抜き通りでも彼らの姿が見受けられる。物見高い通行人の目をささぎる青いカーテンの隙間から、ちらりとでも中を覗くことができるなら、夕暮れ時にウエスト・エンド（ロンドンの西区。富裕階級の住宅地区で商業地区でもある。）のたばこ屋のウィンドーを覗いてみれば、彼らとその唯一の楽しみに興じている姿が見られるであろう。彼らはその店の中で、はおひげと懐中時計の金メッキの鎖とをいかめしく誇示しながら、桶や、パイプを入れた箱の周りをぶらついて、琥珀色の服を着て大きな耳飾りをつけた娘に甘い言葉をささやいている。娘が、男の求愛とガス灯とで身を輝やかせてカウンターの後ろに座っている姿は、近隣のすべての女中の憧れであり、二マイル四方のすべての婦人帽子屋の見習い娘たちの羨望の的でもある。

われわれの主な楽しみの一つは、特定の店に徐々に訪れる変化——その繁栄と衰退——を見守ることである。われわれは町のいろいろなところでいくつかの店と馴染みになり、今ではそれぞれの店の経歴を一から十まで知っているのである。われわれは過去六年間、税金を払っていないと確信をもって言える店の名を少なくとも二十ばかりはすぐにでも挙げることができる。こうした店では同じ商売が二カ月と続いたことはないし、たしかなところ、商工人名録に載っている有りと凡ゆる小売業が営まれている。

一軒の店がある。その来歴は他の幾多の店の典型であり、それが商いを始めたときからその店のことは知っていたので、われわれは特別な関心をもって

その浮き沈みを眺めてきた。それはテムズ川のサリー（イングランド東南部、ロンドン南部に接する州。）側——マーシュ・ゲイトを少し行ったところにある。それはもともと堅固で立派な外観をした私邸であったが、家主が財政困難に陥り、大法官庁の手に落ち、居住者が去って行き、家は荒れ果てていった。われわれがこの建物と馴染みになったのは、この時期であった。ペンキはすっかりはげ落ち、窓は壊れていた。そして手入れをする者もなく、天水桶から溢れる水のため、あたりには青々とした草がいっばいに茂っていた。天水桶には蓋がなく、表戸はいかにもみじめな姿をさらしていた。この界わいに住む子供たちの主な気晴らしは、この家の戸口の上り段のところに群がって、代わる代わる大きな音を立てて扉を二重ノックすることであった。その騒音のために近所のものはみな、とりわけ一軒おいた隣の神経質な老婦人はいたく不快を覚えるのであった。苦情が相次ぎ、小さな鉢に入れた水が何度かいたずら小僧たちにぶっかけられたが、効き目はなかった。こうした事態を見かねて、通りの角の船具商が実に御親切にもノッカーを取り外し、それを売ってしまった。そしてその不運な家は、今までにもましてみじめな姿を呈することになった。

われわれは数週間ほど、親しい間柄となったこの家に御無沙汰していた。ふたたびもどって来たとき、あのみじめな家がまったく姿を消しているのを見て、われわれは呆気に取られてしまった。それは立派な商店に生まれ変わっていて、完成の状態へと急速に近づきつつあった。そして鏝戸の上に、「切れ地・小間物豊富に取り揃えてあります」という大きな広告が貼られていて、間もなく開店することを世間に知らせていた。店は順調に開店の日を迎えた。経営者の名前と Co.（商会）という文字が、目にまばゆいほどの金文字で書かれていた。見事に並んだりボンにショール！ カウンターの背後には、笑劇に出る色男よろしく清潔な襟と白いネクタイをつけた実に優雅な二人の若者が控えていた。店主の方は店をただ歩き回って、客の婦人方に椅子を回したり、近所の人が Co. にあたる人物であろうと推測をしている、店員の中でもとりわけ見目麗わしい若者と大事な会話を交しているだけ

であった。われわれは、こうしたすべての情景を悲しい気持ちで眺めた。この店が、いずれは落ちぶれていくという不吉な予感がしたからである——その通りだった。店はゆっくりと、しかし確実に寂れていった。陳列窓に値札が少しずつ貼られるようになり、札を貼ったフランネルの反物が店の表に置かれるようになり、やがて通りに面した扉に、二階を家具なしで貸しますという貼り紙が貼られた。それから若い店員の一人が姿をまったく見せなくなり、残った店員は黒いネッカチーフを身につけるようになり、店主は飲酒の習慣を身につけるようになった。店は薄汚なくなり、壊れた窓ガラスも打っ棄らかされ、商品が少しずつ姿を消していった。やがて水道会社の者がやって来て水の供給を断つと、この切れ地商人は家主に挨拶の言葉と鍵とを残して自らの行方を断ってしまった。

次に店を開いたのは小間物屋であった。ペンキは前の時よりも地味に塗られたが、店は前と同じように小綺麗に整えられていた。しかし通りすがりに見た感じでは、いつもどことなく金に困ってやりくりし苦しんでいる店のように見えるのであった。われわれは店主の幸運を祈ったが、うまく行かないのではないかと気がもめた。彼は明らかにやもめで、毎朝町に行く途中に出会うところから察すると、どこかに勤め口があるようであった。商売の方は長女がやっていた。可哀そうに、彼女は何かかも一人でやっていた。時折、彼女と同じように喪服を着て、店の奥の小さな居間に座っている二、三人の子供たちの姿をちらりと見かけることがあった。そして夜、この店の前を通ると、長女が子供たちのためか、あるいは売りに出すためか、何か上品な小間物をこしらえているのを必ず見かけるのであった。彼女の青白い顔が、ほの暗いろうそくの明りでいっそう悲しく憂いに沈んで見えるとき、われわれはしばしば思ったものである、慈善に精を出し、このような貧しい人たちのみじめな商いを無思慮にも邪魔だてしている御婦人方に、乏しい生活の糧をけなげに稼ごうとしてそうした女たちが味わっている苦しみや彼女たちの耐え忍んでいる辛い窮乏生活のいくぶんかでも分かるなら、彼女たちは自分たちの虚栄心を満足させる機会や無遠慮に自分をひけらかそうとする気持ちは

捨てて、慈悲深い彼女たちの繊細な感情からして聞くもはばかりのような最後の手段に哀れな女たちを駆り立てるようなことはしないであろうと。

店のことに話をもどそう。われわれはその店を見守り続けた。見た目にもはっきりと、一家の窮乏は日毎に増していった。子供たちはたしかに清潔にしてもらってはいたが、まとっている衣服はすり切れてみすばらしかった。部屋を貸せば家賃の一部にでも当てられたが、二階を借りてくれる人は見つからなかった。そして長女は、徐々に身体をむしばむ結核を病んでいて、以前のように無理をして働くことはできなかった。四季支払い日がやってきた。家主は前の店子の浪費で痛い目に会っていたので、今度の店子の苦労には何らの同情も寄せなかった。彼は差し押さえに出た。ある朝、われわれが通りかかると、差し押さえの雇人が家にあるなけなしの家具を処分し、新しい貼紙が「貸し家」になったことを告げていた。借家人がその後どうなったかは、われわれには知る由もない。われわれは、若い娘があらゆる苦しみや悲しみの彼方にいることと信じている。われわれは神の思し召しを祈るだけだ。どうか平安が彼女とともにありますように。

われわれは、次の段階がいったいどうなるのか妙に確かめたい気持ちだった——この建物がもはや日の目を見れないことは、誰の目にも明らかだったからである。貸し家の貼紙が間もなくはがされ、店の内部に少しばかり改造が施されつつあった。われわれは期待に胸を踊らせ、あらゆる推測を試みた——可能な限りの商売を心に描いてみたが、どの商売をとってみても、徐々に寂れつつあるこの建物の感じにそぐうものはなかった。開店の日がきた。われわれは事の真相をどうして以前に推しはかれなかったのか不思議だった。店は——いちばん羽振りが良いときでも大きいものではなかったが——二店舗に分割されて改造されていた。一軒の方は帽子の木型製造人が入り、もう一軒はたばこ屋が店を開けていた。たばこ屋は、ステッキや日曜新聞も扱っていた。この二つの店舗は、いやに派手な縞模様の壁紙を貼った薄い間仕切りで分けられていた。

たばこ屋は、われわれの記憶する範囲では、どの店子よりも長く商売を続

けていた。彼は赤ら顔をしたふてぶてしいのらくら者で、どんな事が起こっても動ずることなく、ひどい状態に置かれてもせいぜい楽しんでいた。彼は売れるだけの葉巻は売り、残ると自分で吹かした。彼は家主と何とか折り合いをつけて長い間店を借りていたが、やがて追い立てをくって穏やかに生活ができなくなると、落ち着き払って店をたたみ、跡をくらましてしまった。この時から、二軒の薄汚ない店は数知れない変化を見せていった。たばこ屋の後釜は芝居好きの床屋で、彼は多種多様の劇中人物の絵や恐ろしい乱闘の絵を窓に貼りまくっていた。帽子の木型職人は八百屋に店を譲り、芝居好きの床屋のあとを今度は洋服の仕立屋が継いだ。店子の移り変わりはとても数え切れず、最近ではそれが細々と貧しい生活が営まれている建物であるという、奇妙なしかしはっきりとした兆候が認められるだけである。変化はほとんど感じられない程度に進行していった。店子たちは一つまた一つと徐々に部屋を明け渡していき、今ではただ一つ残された小さな居間で生活を営んでいた。最初、「レイディーズ・スクール」とくっきりと文字の彫りこまれた真鍮の表札が勝手口に現れ、それからすぐに二つ目の真鍮の表札がかかり、それから呼び鈴がつけられ、また別の呼び鈴がつけられた。

この昔馴染みの家の前に立ち止まって、紛いようもなく感じられる貧困のこうした兆候を目にしたとき、われわれはその場を離れながら、この家が落ちるところまで落ちてしまったと思った。しかしそれは間違っていた。われわれが最後に通りかかったとき、その場所は「酪農場」となっていて、物悲しそうな家禽の群れが玄関から入ったり、裏口から出たりしていたからである。

第四章

スコットランド・ヤード

スコットランド・ヤードは小さな——きわめて小さな——地域で一方はテ

ムズ川に、もう一方はノーサンバランド・ハウス（10代目ノーサンバランド伯爵に因んでつけられたノーサンバランド家のタウン・マンションで）の庭園と接しており、さらに一方の方角（北東部）がノーサンバランド通りの端と、また別の方角（南東部）がホワイトホール・プレイスの裏手と隣接している。数年前、ストランド通りで道に迷った田舎の紳士が、この地域をたまたま発見したとき、ここに定住していたのは一軒の洋服仕立屋、一軒の居酒屋、二軒の飲食店それに果物入りパイ屋であった。そこにはまた大きな身体をした屈強な男たちが出入りしていて、毎朝五時か六時頃きまってスコットランド・ヤードの船着場にやって来て、大きな荷馬車に石炭を満載し、遠く田舎まで運んで行って住民に石炭を供給していた。荷馬車が空になると男たちはふたたびもどって来て、新たに石炭を積み込むのであった。そしてこうした仕事が年から年中続いていた。

スコットランド・ヤードの住民は、こうした素朴な石炭運搬人たちが必要とするものを供給することで生活の糧を得ていたので、売りに出されている品物やそれらが売られる場所は、外観からすると彼らの嗜好や願望にいかにも即応しているという感じを顕著に示していた。仕立屋はその飾り窓に、小人の着るような小さな皮製のきゃはんや裾の丸いちっぽけなフロックコートを陳列し、戸口のそれぞれの側柱には、石炭を入れるズック袋の見本が場所柄にふさわしく飾られていた。二軒の飲食店は、石炭人夫しか食べられそうにない大きな肉の切り身とずっしりとして食べごたえのありそうなプディングを並べて見せており、果物パイ売りは、よく磨かれた窓台に、小麦粉にたれ汁を混ぜた大きな白い団子にピンクのしみを点在させたものを置いていたが、それは中に果物がいかにもたっぷりと入っていそうに思われ、通りすがりの石炭人夫たちの垂涎^{すいぜん}的であった。

しかしスコットランド・ヤードの中で選りすぐりの場所は、その片隅にある居酒屋だった。あかあかと焚かれる暖炉の火が生き生きとした零囲気を醸し出し、文字盤が白く数字が黒で表されているばかりでかい時計が飾られているこの古風な趣をたたえる板張りの暗い部屋に、からだつきのがっしりとした石炭人夫たちが座り、上等のパークレー・ビールを痛飲し、もうもうたる

紫煙を吐き出し、それが彼らの頭上に重々しく垂れこめ、部屋中が濃い紫煙に包まれていた。冬の夜、この部屋から彼らの声が外気をつんざいてテムズ川の土手まで聞こえるのである。彼らは何か威勢の良い合唱曲を大声で歌い、はやり歌の折り返しをわめき、最後の一節をことさら強調して、天井を揺るがさんばかりに長々と声を張り上げて歌うのであった。

ここでまた石炭人夫たちは、弾薬の勅許製造工場がまだ建てられず、ウォータールー橋（1817年に建造された。）が造られるなど誰も思い及ばなかったありし日のテムズ川の昔話に花を咲かせるのであった。そして彼らは、いったい先行まきゆきはどうなるのかと周りに集まって疑心暗鬼で耳を傾ける次代の石炭人夫たちの心を深く啓発すべく、ものものしく頭を振って見せる。それに対して、仕立屋がまじめくさった仕草でパイプを口から外し、良い結果に終ればいいのだが、良くなるか悪くなるか大いに疑問であり、どう考えていいかはっきりと言えないといった達見を披瀝する——予言者めいた態度から発せられるこの謎めいた意見の表明に、一同は判で押したように完全な同意を与える。こうして彼らは十時になるまで酒を飲み、疑問を出し続けるが、時間がやってくると仕立屋の女房が彼を連れ戻しにやってくる、ささやかな集まりはおひらきになり、翌日の夕方になるとまったく同じことを言ったりしたりするために、ふたたび同じ時間に同じ部屋に集まって来るのである。

この頃、テムズ川をさかのぼって来るはしけ解が、スコットランド・ヤードに漠然としたうわさ話を持ち込むようになった。古いロンドン橋を取り壊し、新しい橋を架けるという物騒な話をロンドン市長がしたと、シティの人間が話していたということだった。最初こうしたうわさは、まったく根も葉もないでたらめな話だと本気にされなかった。というのも、もし市長がそんな腹黒い陰謀を抱いているのであれば、彼は一、二週間ロンドン塔に投獄され、それから大反逆罪で首をくられるだけであることをスコットランド・ヤードの誰もが信じて疑わなかったからである。

しかしながら、うわさの信憑性は次第に高まり、そしてひんぱんに聞かれるようになった。やがて良質ウォールゼンド炭（イギリスのノーサンバランド州南東部の都市ウォールゼンドで

産出される良質の石炭。)を満載した舢舨が、古い橋のアーチのいくつかが塞がれて、新しい橋を建造する準備が現実に行進しているとの確実な情報をもたらした。その記念すべき夜、馴染みの酒場に集まった男たちの顔には興奮の色が隠せなかった。恐れと驚きにどの顔も青ざめ、ひとりひとりが隣りの男の顔を覗き込んで、そこに自らの胸を満たしている気持ちの反響を読み取った。その中でもいちばん古株の石炭人夫が、橋脚が取り除かれてみろ、とたんに川の水はすっかり流れ去って干上がった溝になっちまうぞ、と自信をもって言い切った。石炭を運ぶ舢舨はどうなるんだ？——スコットランド・ヤードの商売は？——おれたちまで干上がってしまうぞ。仕立屋はふだんよりも取り済ました様子で頭をかぶり振り、食卓の上に置かれたナイフを陰気な顔で指差して言った、何が起きたって知らねえ、おれは何も言わねえ——おれはね。だが市長が民衆の怒りの犠牲になったってちっともおかしくはないね。それだけさ。

彼らは待った。舢舨がつぎつぎと上がって来たが、ロンドン市長暗殺の知らせは依然として聞かれなかった。礎石が据えられた。それは公爵——国王(ジョージ5世、在位1820—30。)の弟君——によってなされた(これは間違いで、ヨーク公は起工執り行なったのは当時のロンドン)。何年かが過ぎ、開通の式が国王自らの手によって執り行なわれた(1831年のこと)。やがて古い橋の橋脚が取り払われた(1832年のこと)。その翌朝、スコットランド・ヤードの住民が、対岸のペドラーズ・エイカー(ウエストミンスター橋の北側の河畔に広がる約1エイカーの土地。伝説に)まで足をまったく濡らさないうで渡れると確信して目をさましたとき、何事もなかったように水が流れているのを見て、彼らは啞然としてしまった。

この最初の改良は予想とは大いに違った結果を生み、スコットランド・ヤードの住民はその影響をもろに受けることになった。飲食店の経営者の一人は世間の顔色を伺い、これまでとは違った客筋を求めようとした。彼は小さな食卓に白いテーブルクロスを掛け、駆け出しの画家に頼んで店のウィンドーの小さなガラスに十二時から二時まで、ほかほかの肉料理のサービスがありますといった宣伝を書かせていた。進歩がスコットランド・ヤードの戸口まで足早に押しかけてきた。ハンガーフォードに新しい市場が生まれ(1680年

た古いマーケットは1815年に閉鎖され、1831年に新しく造り換えられ、警視庁がホ
 した。この市場も1862年チャリング・クロス駅ができると姿を消す。）、
 ワイトホール・プレイスに拠を構えた。スコットランド・ヤードに出入りす
 る人たちが増え、衆議院の定員が増えた。ロンドンの代議士たちはここを通
 るのが近道だと考え、他の多くの歩行者がそれになった。

文明の波は、間違いなく押し寄せていた。われわれはそれを見て慨嘆し
 た。テーブルクロスという新奇な代物に男らしく抵抗していた食堂は、相手
 の店が繁盛するにつれて落ち目になっていった。そして、二軒の店の間に不
 穏な反目が生まれた。紳士気取りの店主の方は、今では夕方スコットランド・
 ヤードでビールをいっぱいやるのはやめて、パーラメント通りの「パーラー」
 で水割りジンを飲んでいた。果物パイ売りは、今でも馴染みの部屋に通い続
 けていたが、もっぱら葉巻を吹かし菓子屋と自称して新聞を読み始めた。古
 顔の石炭人夫たちは依然として昔ながらの酒場の暖房を囲んでいたが、話は
 しけていた。放歌高吟も、賑やかな歓声も今では聞かれなかった。

スコットランド・ヤードの現状はどうであろうか？ あの馴染み深い習慣は
 一変し、住民の昔ながらの朴訥さはすっかり影をひそめてしまった。今にも
 潰れそうだった昔懐かしい居酒屋は、広大な酒場に変身している。金ばくを施
 した宣伝文句が酒場の外部を飾っていて、詩歌の文句を借りて、ある種のビ
 ールを飲めば柵をしっかりと擱んで歩かなくていけません、といったことを
 匂わしている。仕立屋は飾り窓に絹のボタン、毛皮の襟、毛皮の袖口のつい
 た異国風な茶色の外套の見本を展示している。彼は、外側に縦縞が一本入っ
 たズボンをはいている。そしてわれわれは、彼の助手（今では助手を雇って
 いるのだ）が、同じズボンをはいて店の仕事台に腰かけているところを目撃
 した。

小さな家並みの外れにある目新しい二階建ての煉瓦造りの小屋で、靴屋
 が商売を始めていた。彼は、長靴——正真正正^{フーフ}銘のウェリントン・ブーツ
 （ウェリントン公爵<1769—1852>によ）——を売り場に並べている。それは数年
 前には、この土地に昔から住んでいた人たちの見聞きしたこともないような
 履き物である。婦人服の仕立屋が同じ通りのまん中にまた別の小さな店を開

けたのは、ほんの先日のことであつた。このように高まっていく変革の気運の中で、もはやこれ以上の変化は生まれまいと思われた矢先、宝石商人が現れた。彼は金メッキした無数の指輪や銅製の腕輪を並べるだけでは気が済まず、「御婦人方の耳に刺し通せます」という広告を貼り出した。それは今でも飾り窓に貼りつけられている。婦人服の仕立屋はエプロンに小物入れをつけている若い女を雇っている。そして例の仕立屋は、お持ち寄りの服地仕立てます、と広告している。

こうして世の中がせわしく移り変わり、誰もが新しい事物に目を奪われている中で、この由緒ある場所の顔唐を悲しそうな目で眺めている老人がただ一人残っている。彼は人と交わることはせず、ホワイトホール・プレイスと通じる辻に面した壁の隅にある木製のベンチに腰を下ろし、毛のつやつやしたよく肥えた愛犬がはねまわるのを黙々と眺めている。彼は、スコットランド・ヤードの守り神である。幾星霜が彼の頭上を通り過ぎていった。しかし天気の良い日も悪い日も、暑くても寒くても、雨曇りの日もかんかん照りの日も、霰あられや雨や雪が降ろうとも、彼は少しも変わることなくおきまりの場所にいる。不幸と欠乏とが彼の顔に刻まれている。身体は寄る年波で曲がり、長年の苦難を経て頭には白いものが混じっている。しかし来る日も来る日も彼はここに座り、昔日の思いに耽るのである。スコットランド・ヤードとこの世に対して目が閉ざされるまで、彼は弱々しい足をひきずってここに通い続けることだろう。

これから数年経って、次の時代の古物研究家が、この時代世の中を騒がせた人々の奮闘と情熱の跡をとどめる何らかの古臭い記録を調べるとき、われわれが今書きとめた記録に目を走らせることがあるかもしれない。しかし、過去の歴史についての彼のあらゆる知識や古文字の知識や、書物を収集する能力や、長い生涯にわたる味気ない研究や、ひと財産かけて集めたほこりだらけの書物——それらすべてを傾けてみても、スコットランド・ヤードやわれわれがこれを描くにあたって言及したいかなる目標物の所在をつきとめる助けにはなってくれないだろう。

第五章

セヴン・ダイアルズ*

たとえトム・キングと例のフランス人（フランス人の名はトンソンであるが、二人ともジョン・テイラー〈1757—1832〉による滑稽詩『ムッシュ・トンソン』を基にして書かれた、W.T.モンクリーフの同名の笑劇に登場する人物。トム・キングはコヴェント・ガーデンのセント・ポール教会の柱廊でコーヒー店）がセヴン・ダイアルズを不滅のものにしなかったとしても、セヴン・ダイアルズは自ずから不滅の存在になったであろうと、われわれは常々考えている。セヴン・ダイアルズ！ 歌と詩の花開く街——最初の感情の発露、そして最期の言葉。キャトナックとピッツ（ジェイムズ・キャトナック・ピッツ、1765—1844。両者とも大道で売る俗謡や物語や犯罪ニュースなどの印刷業者で、セヴン・ダイアルズ近辺に拠を構えていた。特に犯罪記事や死刑囚の最期の告白などを刷って載せたブロード・サイドと呼ばれる片面刷）の名によって聖別されたところ——ペニー・マガジン（1830年代に新しい印刷技術が導入されるようになり、『ペニー・マガジン』とか『ペニー・ドレッドフル』のような1ペニー程度で大衆が買える廉）が俗謡新聞（ほぼ1ヤードの長さがある価な出版物の大量生産が可能になった。）が俗謡新聞（縦長の紙に、俗謡をたて三列に分けて印刷し、街頭で「3ヤード、）に取って代り、絞首刑が存在したことを誰一人知らない時代がくるとき、人々はその名を聞いて手回し風琴と大道商人を懐しく思い出すことだろう。

この場所の構造を見るがいい。コーディアス王の結んだ結び目（フリジアの王コーディアスが戦車のながえにくびきを結びつけた結び目。この複雑で難しい結び目を解く者は、アジア中を支配するとの予言があったが、アレクサンダー大王が剣でこれを切断し、予言を成）はそれなりに大変なものである。ハンプトン・コート（ロンドンから西方12マイルのところにある旧王宮。ヨーク大主教トマス・ウルジーの邸宅として建てられたもので、後年ヘンリー8世に献上され、それ以来ほぼ2世紀の間、イギリスの

* 17世紀の終り頃に設計された放射状に延びる7つの通りが交差する辻で、その中心にドリア式の石の柱が立てられていて、その上に、6面（2つの通りは同じ方角にあったため）にそれぞれの方角を刻んだ石が載せられていた。ここは昔のバラード売りの中心地であり、近くのセント・ジャイルズ地区とともにスラム街として有名であった。

王宮として使用された。テムズ河畔の広大な敷地の中心から南方6マイルのノーウッドに1831年にできた保養地で、当初は人気を呼んだがじきに廢れてしまう。)の迷路も然りである。つけるのも大変だが、外すとなるとこれはもうまったく不可能と言える固く結ばれたネクタイも然りである。しかしかにかに複雑なものでも、セヴン・ダイアルズに比肩し得るものはない。これと同じような入り組んだ通りや路地や小道や裏道が他のどこにあるだろうか？ ロンドンのこの錯雑とした地域の他に、イギリス人とアイルランド人が純粹に混ざり合った場所がどこにあるだろうか？ われわれは、最初に述べた話の信憑性に大胆に疑問を投げかけるものだ。われわれは、普通の大きさの家に——それも借屋人がいる家に——トンプソンという人物に少なくとも二人や三人にほとんど確実に会えると思って、出まかせに訪ねて行くのだって無鉄砲だと考える。しかしフランス人だなんて！ セヴン・ダイアルズにフランス人がいるなんて！ そんなばかな！ 彼はアイルランド人だったのである。トム・キングの教育は、子供の頃疎かにされていた。そしてその男の言うことの半分も理解できなかったので、その男がてっきりフランス語を話していると思ったのである。

「ダイアルズ」に初めて身を置き、ベルツォーニ(G. B. ベルツォーニ、1778—1823。イタリアの旅行家で、1803年にイギリスに渡り、6フィート7インチもある長身で力わざを見せつけて人気を博し、後にエジプトの古代遺物の発見や遺跡の発掘で名をなした。)のように模糊とした七つの道の入口にたたずみ、どの道に入ろうかと思案に暮れる人は、しばらくは好奇心に目を奪われて周囲を眺めることだろう。彼が紛れ込んだ広場から、通りと路地があらゆる方向に放射状に延びており、屋根の上に垂れ込め薄汚れた遠景をぼんやりと閉じ込めている不潔な煙霧の中に、その姿を没している。そして、ここまでは何とか入り込んで来たものの、すでにまったく力つきて、周囲の狭い路地に入り込む力を失ったかに見える新鮮な空気をわずかでも呼吸しようとしてやって来たように見える人たちが、群れをなして方々の角をぶらついている。生粋のロンドン育ちなら別だが、彼らの様子と住居は、人を啞然とさせるものだ。

広場の一角に、二人の女を囲んで小さな人垣ができていた。この御婦人方は、苦味入りジンをたっぷりときこしめしていたので、やがて何か家の中の

取り決めのことで意見が対立し、今にも殴り合いに訴えて、その揉め事にけりをつけようとしていた。そして同じ家に住む女たち、隣家の女たち、さらには争っている女のどちらかの尻押しをする女たちが、並々ならぬ関心を寄せてそのいがみ合いに加わっていた。

「さっさとやっちまいな、セアラ」とふしだらな服装をした女が唆す。

「やりなよ！ あたしの亭主がゆんべ、あたしの目を盗んでこの女と酒場にしけこんだんだったら、この女の目ん玉を引っこ抜いてやるわ——雌ぎつねめ！」

「いったいどうしたんだね？」と急いでこの場に駆けつけて来た別の年増が尋ねる。

「どうしたって！」と最初に口をきいた女がやり合っている下種な女に当てつけて言う、「かわいそうじゃないか。サリヴァンのおかみさんには五人の可愛い子がいるっていうのに。昼から雑働きに行ってるうちに、このあばずれ女がやって来て亭主をかどわかしましたんだ。今度のイースターの日曜日で、結婚十二年になるっていうのにさ。あたしゃ、結婚証明書を見たんだから。ついてないだの水曜日だったわ。いっしょにとても楽しくお茶を飲んだの。あたし偶然言ったのよ、『サリヴァンの奥さん』——」

「あばずれとは何だえ？」と相手の女のために新たな戦いの火ぶたを切ろうとじりじりしていた助太刀が口をはさんだ。「ヤッホー」と酒場のボーイが加勢に加わる、「ぶっ倒してやれ、メアリ！」、「あばずれとは何だえ？」と助太刀の女が繰り返す。

「大きなお世話さ」と敵は力をこめて言う、「大きなお世話だよ。とっととおうちに帰りな。酔いがさめたら、靴下の繕いでもやるんだね。」

大酒を飲む習慣だけでなく、たんすの中味にまで及ぶこのいささか個人的な中傷に、この御婦人は怒り心頭に発して、野次馬の「やれやれ」といううるさい催促に大変な素早さで応じる。方々でつかみ合いが始まり、田舎芝居のピラの決まり文句ではないが、「巡査到着、警察署内部、胸に迫る大団円^{デヌワン}」で一件落着となる。

ジン酒場のあたりをぶらついた道まん中で言い争ったりしている大勢の人の群れの他にも、空いた場所にある柱という柱（もともと歩道に車が入れないようにするために置かれた鉄柱。その多くは用済みになった大砲で、砲尾を下にして置かれていた。）に人がいて、何時間でも大儀そうな様子で辛抱強くそれに寄りかかっている。奇妙な話だが、ロンドンに住むある種の人間は、柱に寄りかかる以外には何の楽しみも持っていないようである。喧嘩は別として、本職の煉瓦職人がそれ以外の娯楽に興じている姿を見たためしがない。週日の夕方、セント・ジャイルズ教会（セヴン・ダイアルズの北にあるこの教会のあたりは、当時、悪と不潔のたまり場であった。）のあたりを抜けると、煉瓦の粉末やのろをまだらにつけたファスチャンの服を着た煉瓦職人が柱に寄りかかっている。日曜日の朝、セヴン・ダイアルズを歩いていると、そこでもまったくすんだとび色か明るい色のコール天のズボン、編上げの半長靴、青いコート、大きな黄色のチョッキでおめかしをした煉瓦職人が柱に寄りかかっている。信じられないことだが、一丁羅を着て日もすがら柱に寄りかかっている人間がいるのである！

これらの通りには特有な趣があり、さらにそれぞれが隣りの通りに酷似していることから、何も知らないで「ダイアルズ」に入り込んでしまった歩行者は、いやが上にも困惑を覚えるのである。彼は、薄汚ない家がまばらに立ち、溝でころげ回っている着のみ着のままの子供たちと同じような不恰好で歪んだ建物の囲む路地が、時折ふいに現れる通りをいくつも横切っていくのである。あちこちに店が見られる。一軒の小さな薄暗い雑貨屋は、お客が入って来たことを告げたり、幼くして金銭に対する情熱を發揮するようになった若い紳士（こそ泥のこと。）の到来を知らせたりする、ひび割れた鐘を扉の裏側に吊している。また別のいくつかの店は、貧弱で薄汚ない居酒屋を呑食する立派な高い建物に、まるで支えてもらっているように寄りかかっている。そうした店の、壊れて応急修理を施したいいくつも並んだウインドーに、「ダイアルズ」が建造された頃は青々と茂っていたかも知れない植物が、「ダイアルズ」自体と同じように薄汚れてしまった鉢に入れて並べられている。ぼろ、骨、古鉄、台所の余り物を買入れる店が、小鳥やうさぎを売るペット店と清潔さを競い合っている。この店は、箱の一つから出ることを許された本来

の意味におけるいかなる鳥（原語の 'bird' には、「かも」、）も二度ともどって来ることはない（ノアは洪水が引いたかどうか確かめるために、鳥や鳩を何度か箱舟から放つ。ノアのもとに二度ほど帰って来た鳩も三度目には帰って来ず、ノアは洪水が引いたのを知）という絶対の確信さえなければ、ノアの箱舟とでも想像できそうである。哀れな南京虫に生活の場を与えてやるために（原語の 'bug' には「南京虫」と「イギリス人」の二重の意味がこめられている）、（が、この周旋屋が南京虫のうようよしている不潔な店であることを示唆している。）情け深い人によって設けられたと思われる周旋屋があって、通学学校、安く見られる劇場、代書屋、しわ伸ばし機（これを所有して借り手から使用料を取ることは、イギリスの貧しい人たちの間で生活費をかせぐ一つの手）、舞踊会や社交会の楽譜などの広告をあちこちに貼っている。この店を描いたことで、この画題の「静物画」は完成する。そして薄汚れた男たち、みだらな女たち、薄汚い子供たち、ばたばたと飛ぶ羽子や騒がしい音を立てる羽子板、悪臭を放つ排水管、腐った果物、見るからに怪しげな牡蠣（かき）、やせこけた猫、意気消沈した犬、それに骨に羽をつけたような家禽がこの静物画の陽気な添え物である。

家の外見や、その家の住人をちらっと見て、ほとんど何の魅力も感じないとしたら、家にしろ住人にしろ、さらに親しくなったところで、最初の印象が好転することはほとんど期待できない。一つ一つの部屋にそれぞれ間借人がいて、すべての間借人が、田舎の牧師補を実に驚くほど「生み増やす」あの不思議な天の配剤（「創世記」第1章28節、第9章1節に「生めよ、ふえよ地に満ちよ」という言葉がある）によって、大抵は子沢山の大家族をかかえている。

店に姿を見せているのは、おそらく安料理の仕出しか、薪や磨き石（炉床や戸口の階段などを磨くもので、軟石や粉末）、あるいは十八ペンスそこらの流動資金でやれる商売なら、何でも手がけている男である。彼と家族とは、店とその奥にある小さな暗い居間で生活している。さらに、裏手の台所には 아일랜드人とその家族が住んでおり、手間賃仕事——じゅうたんたたきのような仕事——をする男が、家族と表の方の台所で寝起きしている。表二階の部屋には妻と子供のいる別の男が住み、裏二階には「刺しゅう仕事を引き受け、とってもお上品な服装をした若い女」で、「お友だち」のことをやたらと口にし、「下品なことには我慢のできない」女がいる。三階の表部屋、それにその階に

住む他の間借人は、下の人たちを丸写しにしたようである。ただ、裏の屋根裏部屋に住むうらぶれた男は別である。彼は一軒置いた隣のコーヒー店から、毎朝半ポイントのコーヒーを取り寄せる。コーヒー・ルームと呼ばれている、そのコーヒー店の表側のほら穴のように狭苦しい部屋には暖炉があって、その上に、「間違いを避けるために」お客様は「現金払いをお願いします」といねいに要請する文字が刻まれている。そのうらぶれた男はどこか神秘感をただよわす人物であるが、一人こもりっきりの生活をしていて、半ポイントのコーヒー、一ペニーのパン、半ペニーのインク以外には、時たまペンをかうぐらいのことしかしないので、同居人たちは、ごく自然に彼が作家であると考えている。そして彼は、ウォレン氏（ディケンズが子供のとき働いていたウォレン靴墨工場の最初の経営者であるジョナサン・ウォレンは、詩人を雇い、広告に詩を用いて、商品の販売に効果をあげようと努めていた。）に献呈する詩を書いているのだというわさが、ダイアルズに広まっている。

暑い夏の夕刻、ダイアルズを通り、同じ建物に住む何人かの女たちが戸口の上り段のところでは世間話をしているのを見れば、彼女たちの間にまったく和やかな空気が漂っており、ダイアルズ生まれの住民以上に素朴な人たちは想像できないと、誰でも思いたくなる。しかし何と悲しいことだ！ 店の男は家族を虐待する。じゅうたんたたきを商売にしている男は、その専門の仕事に妻にまで及ぼしてしまう。表二階の主あらしは、自分と家族が就寝したのに三階の表部屋の家族が、自分たちの頭上でいつまでもはね回っているので、三階の家族に対して執拗な恨みを抱いている。三階の裏部屋の者は、表の台所に住む子供たちのやることに差し出口をきく。アイルランド人は、一晩おきに酔っ払って帰宅し、だれかれかまわずくっつかかる。そして裏二階の女は、何かにつけて金切声をあげる。階と階との間に反目が生まれる。地下室をめぐらしている男も負けてはいない。Aのおかみが、「しかめっつらをした」と言ってBのおかみの子供を「びしゃり」とやる。すぐさまBのおかみは、Aのおかみの子供が「悪たれ口をたたいた」と言って、その子に冷水を浴びせる。亭主たちがその反目に巻き込まれる——いざこざが全戸に広がる——挙句の果てに殴り合い、巡査到来となる。

第六章

モンマス通り瞑想

われわれは常々、古着商売では随一のそして正真正銘の中心地としてモンマス通り（セヴン・ダイアルズの北西を走る通りであったが、1885年にできたシャフツベリー・アヴェニューの中に消えた。）に特別の愛着を寄せてきた。モンマス通りは、その歴史の古さゆえに尊ぶべき場所であり、さらにそれが社会に裨益する点に、われわれは多大の敬意を払うのである。ホリウエル（ストランド通りの北側をそれと平行して走っていたが、現在は姿を消している。古本屋や古着屋の並ぶ古い通りで、モンマス通りが古着の代名詞なら、ホリウエルは軽蔑すべき通りである。通行人にその気があってルは古本の代名詞だった。）は軽蔑すべき通りである。通行人にその気があってもなくても、無理矢理むさ苦しい店にひっぱり込んで、服を着せるあの赤毛で赤い頬ひげをはやしたユダヤ人たちには、まったく辟易してしまう。

モンマス通りの住民は、一風変わった人たちである。彼らは平穏な暮らしを愛する控え目な人たちで、たいていは奥深い地下室とか奥の小さな居間に閉じこもっていて、めったに世間に顔を見せることはない。ただ、涼しい黄昏時になると、舗道に出した椅子に腰をかけ、パイプを吹かしたり、一団の楽しい子供の道路掃除人よろしく溝の中ではしゃぎ回っている愛児たちを眺めている彼らの姿が見られるのである。彼らの薄汚れた物思わじげな顔には、通りの人の行き来をどことなく楽しんで眺めているような表情が見受けられる。彼らの住居で目立つ点は、外観を繕うとか、居心地良くするといったことをまったく考えていないところである。これは深い冥想に耽ったり、じっと座って仕事をする人にはよく見受けられることである。

この愛すべき通りが、古い歴史を持っていることはすでに述べた。「モンマスのレース飾りのコート」は、一世紀前の通り言葉であった。モンマス通りはその頃と少しも変わっていない。たしかに、木製のボタンのついた水先案内人の大外套が、裾がゆったりとしてレースの縁取りのある厚手の外套に取って代り、大きな垂れ飾りのついた刺しゅう入りのチョッキは折り返し襟

のついたダブルの格子縞のチョッキに場所を明け渡し、奇妙な形をした三角帽子は、御者たちのかぶる山の低いつば広の帽子に席を譲っている。しかし、変化したのは時代であって、モンマス通りではないのだ。あらゆるものが流行り廃りを経験する中で、モンマス通りは今でも流^{ファッション}行の埋葬場所であることに変わりはない。そして、現在の様子から判断する限り、すべての流行が廃れ、埋葬するものがなくなるまで、モンマスはその役目を果たし続けることだろう。

われわれは、かつて名をなしていた人たちが亡くなり、あとに残された衣服がこうして形づくる広大な森を歩き、それらが呼び起こしてくれるくさぐさの思いに耽るのが好きである。われわれは着手を亡くした外套を、次には持ち主を失なったズボンを、それからすぐに遺品として残された派手なチョッキを想像裡に描いた人物の身に着けさせ、その衣服の形や流行りの型から、かつての持ち主の姿を眼前に描き出してみる。このような瞑想に耽っているうちに、何列にも並べて掛けられていた外套が、掛けくぎからそっくり跳び出してきて想像上の人物にまわりつき、その腰まわりにひとりでボタンを掛けていったのである。並んで掛かっていたズボンが、負けてはならじと跳び下りてくる。チョッキは誰かの身体にまといつこうと躍起となっていて、今にも張り裂けんばかりだ。突然、おびたしい数の靴が、ぴたり合う足を見つけてどしんどしんと音を立てて通りを歩き出した。その音でわれわれは快い夢想からすっきり醒め、当惑顔でゆっくりと店を離れた。その姿を見てモンマス通りの住民は目を丸くし、通りの向こう隅にいた巡査は少なからぬ疑いの目を向けたものである。

先日のこと、こんな具合に瞑想に耽り、ある想像上の人物の足に、実を言うともまるまる二サイズほどは小さい編み上げ靴を履かせてみようとしていたとき、店の飾り窓の外に並べられている二、三着のスーツに目がとまった。それを見て、すぐわれわれの心に浮かんだのは、それらがそれぞれ違った成長段階において着用された同じ人物のもので、ちよくちよく見られる例の出来事の不思議な符合によって、現在同じ店に一緒に売りに出されているに違

いないということであった。そんな考えは、実に突拍子もないものに思われた。そこで、うっかり釣り込まれてはいけないと決意を固めて、もう一度その服を見つめた。いや、われわれの考えは間違っていない。見れば見るほど、先ほど抱いた印象に狂いはないと確信を強くしたのである。これらの古着には、まるで羊皮紙に着用者の自叙伝が大きな文字で記されているのを眼前で見るように、その人物の全生涯がはっきりと記されていたのである。

最初の古着は、継ぎはぎをしたひどく汚れたスケルトン・スーツ（以下の説明を参照）だった。それはベルトやチューニックがまだ現れず、昔ながらの服の概念がまだ残っていた時期に少年たちが着用させられた青い布地のきっちりとした服で、両肩に一列の飾りボタンのついた窮屈な上着^{ジャケット}で体を締めるようにし、肩の上でズボンのボタンをとめて、ちょうど腋の下のところで両脚が引っ掛けられているように見えるもので、少年の体型を実に釣り合いのとれたものに見せる創意工夫を凝らした服であった。それは、見るからに都会の少年が着る子供服だった。ズボンの裾や上着の袖が短かく、ひざのところにロンドンの街で遊ぶ少年に特有のふくらみが見られたからである。その少年が、小さな通学学校に通っていたことは明らかだった。もしきちんとした寄宿舎制の学校であったなら、ひざのところをこすってこんなに白くなるまで床の上で遊ばせることはしなかったであろう。この少年にはまた甘い母親がいて、たんまりと半ペニー銅貨をやったらしい。それを実証するように、ポケットのあたりと襟もとには、腕利きの古着屋でもうまくごまかせないほどの、ねばねばとした食べ物^のしみがいっぱいに残っていた。この家族は、まともな生活はしていたが、お金を持って余すような身分ではなかった。そうでなければ、これほど小さくて着れなくなるまで、このスーツを着ることはしなかったであろう。少年はその後、筒型の上着とコール天のズボンを身につけるようになった。それを着て少年は学校に通い、習字を習った——ペンを拭ったところが証拠となるなら、それもかなり黒いインクで書いていたようである。

この上着と黒いスーツの次に少年が着たのは、小さなコートだった。父親はすでに亡くなっており、母親は少年にどこかの事務所の使い走りの仕事を見つけてやったのだ。着古したスーツはその時期のものだ。着れなくなる前にそれは色がさめてすり切れてしまっていたが、清潔に保たれていて汚れは少しもついていなかった。可哀そうに！ 乏しい食事を取るにも明るさを装い、腹を空かせた息子が十分に食べられるようにと、自分のわずかな食べ物まで譲ってやる母親の姿が想像できるのだ。母親は絶えず息子の幸福を願い、その成長を誇らしく思っていたが、息子が成長して大人になったとき、息子の愛情がさめ、優しさが薄れていき、二人で交してきたそれまでの約束事が忘れられてしまうのではないかという思いが、彼女の胸中を時として過るのであった。こうした矛盾した気持ちが混ざり合う中で、母親はほとんど耐えられぬほどに胸の痛み——その頃でさえ、たった一言息子から思いやりのない言葉をかけられたり、冷いまなざしを向けられるだけで母親は痛切に胸を痛めたことであろう——を覚えたのだ。その情景があたかも眼前に繰り広げられているかのように、生々しい姿を取ってわれわれの心に押し寄せてきたのであった。

これは日常茶飯の事であり、そうした事が起こることは誰でも承知している。しかし、今起こり始めている変化を目にし、あるいは目にしたように思ったとき——どちらでも同じことであるが——、われわれはそのような悲しい事がわずかでも起こり得るという可能性に、たった今初めて気付いたかのように、悲しみに打たれたのであった。次に見たスーツは、粋ではあるが薄汚れていた。派手に作られていたが、あのすり切れた前の服の半分も立派なものではなかった。それは、怠けて街をぶらついたり、不良仲間と交わっていたことを偲ばせるもので、未亡人の慰みが急速に失なわれていったことを物語っているように思われた。われわれはそのコートが、同じ型の別の三、四着のコートと連れ立って、夜どこかの盛り場をぶらついているのを想像できた——いや想像できたと言ったが、眼前に見ることができたのだ。そうした光景なら、これまでいやというほど目にしているのだから。

われわれは同じ店の飾り窓から即座に服を選んで、十五歳から二十歳ぐらゐの六人の若者に着せてみた。彼らの口に葉巻をくわえさせ、ポケットに手をつまませて、彼らが見だらな冗談を飛ばしたり、しきりにののしりながら街をぶらついたたり、街角にたたずんだりしている姿を眺めた。じっと目を放さないで眺めていると、やがて彼らは帽子をいっそうかき上げて、肩で風を切って居酒屋に入って行った。それからわれわれは、母親が夜が更けても寝ないで、一人ぼつねんと息子の帰りを待っている佻しい家に入って行った。心配に胸を焦がしながら部屋の中をゆっくりと歩き回り、時おり表口を開けて暗くがらんとした通りを物悲しく眺め、また部屋に引き返し、ますます落胆するばかりの母親の姿をわれわれは眺めた。そして帰って来た息子の残酷な脅しに耐え、酔っ払った息子に手をかけられてもじっと我慢している母親の姿をわれわれは目にし、母親が自分の佻しくみじめな部屋でひざまずいたとき、胸の奥から苦悩の涙がほとぼしり出るのを耳にしたのであった。

歳月が流れ、上の方に吊されているスーツが脱ぎ捨てられるまでに、以前にまして大きな変化が生じていた。それは、がっしりとした身体つきで、肩巾が広く、たくましい胸をした男のものだった。あの大きな金属ボタンのついた、裾の広い緑色のコートを一と目見れば誰でも分かることだが、そのコートの着用者は、外に出るときはたいてい犬を連れ、その男とそっくりのぐうたらな与太者と肩を並べて歩く男であることがすぐに分かった。少年の頃の悪習は、年を取るにつれてひどくなっていった。それからわれわれは、その頃の彼の家庭——そんな場所が家庭と呼べるとしての話である——を想像してみた。

われわれの目に入ったのは、青白い顔のやせこけて腹を空かせた子供はごろごろといるが、家具がなくがらんとしてみじめな部屋であった。男は、妻や子供の悲嘆をののしり、もどって来たばかりの居酒屋に千鳥足で向かう。そのあとを、病気の幼児を抱いた妻が追いかけ、大声でパンを求める。それからわれわれの耳に聞こえてきたのは、男が妻を殴ったために通りのまん中で始まった言い争いや、口汚ないなじり合いであった。そしてわれわれは、

さらに想像の翼を広げて、有毒な空気が垂れ込め、人でごったがえす叫喚の巷にあるロンドンの救貧院に入って行った。年老いて身体の衰弱した女が、息子のために神の許しを乞いながら、手を取ってくれる我が子もなく、額にそよぐ天からの清らかな空気もない狭く暗い部屋で死を待って横たわっている。見知らぬ人の手がその冷たく輝きを失なった目を閉じてやり、血の気の失せた半ば閉じられた口唇からささやかれる言葉を聞いてやるのは、見知らぬ人の耳であった。

すり切れた綿のネックチーフやその他のごくありふれた服飾品と一緒に、粗末な筒型のフロック・コートがあって、この人物の経歴を締め括っていた。投獄そして有罪の判決——流刑もしくは絞首刑。もう一度少年時代のようにつつましく満足して、こつこつと働くことができるなら、また、一週間、一日、一時間、一分だけでも今一度生命が与えられて、今では貧民墓地で塵にかえっている冷たくこの世のものではない母親に、本心からの悔悛の気持ちを一言でも言うことができ、また母親から心からの許しの言葉を聞くことができるなら、その男はどんなものでも投げ出したことであろう。その男の子供たちは街ですさんだ生活を送り、妻は未亡人となって食べるものにも事欠くようになり、妻も子も、夫や父親であった男の消し難い汚名から逃れることができず、切羽詰まったあげくに、何千マイルも離れた異国の地で男がおそらく幾年にもわたってゆっくりと下って行った死の坂を、一気に駆け下りて行ったことであろう。この話の結末を知る手掛かりはない。しかし、それは容易に推測できることだった。

われわれは少し歩を進めて、思索の本来の明るい調子を取り戻すために、どんな腕利きの靴屋をも驚かせるほどの速さと正確さでもって、想像上の脚や足に地下室の棚いっぱい並んだブーツや靴を履かせていった。特に目を引くブーツがあった——愉快で、優しく、暖かい感じのそのトップ・ブーツ（上部の折り返しの部分の色や材料が他の部分と違っている長靴）は、われわれの心に強い関心呼び起こした。そのブーツを見て三十秒と経たないうちに、われわれは、立派な身体をした赤ら顔の陽気な菜園経営者の足にそれを履かせてみた。それはその男に

打ってつけだった。彼の丸々と太った大きな脚がブーツの上で脹れあがり、あまりにきつくて、履くときに引っ張る蹠を押し込むことができなかった。コール天の半ズボンとトップ・ブーツとの境目に長靴下が見えていた。青いエプロンは腰のまわりにまくり上げられ、赤いネッカチーフと青いコートを着て、白い帽子を片方にかしげてかぶっていた。彼は大きな赤ら顔いっばいに笑みを浮かべて、気楽で幸せであるという気持ち以外は味わったことがないかのように、さかんに口笛を吹いていた。

この男こそ、われわれの心になつた人物であつた。彼のことなら何もかも知っている。彼がずんぐりとした小さな馬に引かせた緑色の二輪の荷馬車で、コヴェント・ガーデンにやって来るのを何百回も見ることがある。われわれが彼のトップ・ブーツに愛情のこもった目を向けていた矢先、そのブーツの隣りにあつたデンマーク・サテン（ラシャの一種。羊毛で織つた柔らかくなめらかな地で、婦人靴などに用いる。）の靴に、あだっばい姿をした女中が出し抜けに飛び込んで来た。つい先だつての火曜日の朝、われわれがリッチモンド（テムズ川に臨むサリー州の都市。）から町に入つて来たとき、ハマスミスの吊り橋（1827年に建造されたロンドン近郊では最初の吊り橋。）のロンドン側で、馬車に乗らないかという彼の誘いに応じた娘であることがすぐに分かつた。

派手なボンネットをかぶつた実に粋な女性が、黒い縁飾りのある灰色の布製のブーツに足を入れたが、そのブーツは例のトップ・ブーツの向こう側で、つま先を懸命に突き出し、躍起になつて彼の気を引こうとしているようだった。しかし、我が友人の菜園経営者は、そうした甘い手管に迷わされる様子はまったく見せなかつた。というのも、そのブーツが誘惑しかけたとき、お前さんの魂胆はよく承知してますぞ、と言わんばかりに、心得顔に流し目をして見せた以外には、まったくそれに気をとめることはしなかつたからである。しかしながら、彼の冷淡な態度は、頭が銀の杖を持った老紳士の実にいんぎんな態度によつて十二分に償われた。この老紳士は、棚の一隅に置いてあつた大きなへり地で作つた靴をよたよたと履いて、布製のブーツを履いた御婦人を賞讃する仕草をさかんにして見せたので、われわれが長い腰

皮のついたパンプス（ひもで縛らないかかとの低い）を履かせた若者はすっかり面白がって、彼の身体にすっとまとわりついたコートがはちきれんのではないかと思えるほど笑うのであった。

しばらくの間、われわれは大いに満足してこのささやかな無言劇を眺めていたが、これまで想像に描いてきたすべての人物たちが、さらにはわれわれが、踊れるようにとあわててできる限りの足を押し込めてやった背後の数知れぬ長靴や短靴の「バレエ団」が、今にも踊り出そうと列を整えているのを見て啞然としてしまった。その瞬間、ある音楽が鳴り出して、それに合わせて直ちに踊りが始まった。菜園経営者の軽快な足さばきを見るのは実に楽しかった。彼のブーツはまず片側に進み、今度はもう一方の側に進む。それから跳び上がって両足を交互に回して見せる。そしてすり足を使い、デンマーク・サテンと向かい合って踊ったかと思うと前進し、後退し、くるっと回ってまた同じ旋回を始めから繰り返すのである。しかもこんな激しい踊りなのに、少しもへこたれた様子を見せないのだ。

デンマーク・サテンもまったく遅れは取らず、あらゆる方向に跳んだりはねたりしている。その踊り方は、布製のブーツほどきちんとしたものでもなく拍子にも合っていなかったが、それでも心から踊りを楽しんでいるように見えたので、われわれは布製のブーツの踊り方よりもデンマーク・サテンの方が気に入ったことを率直に告白するものである。へり地の靴を履いた老紳士は、誰よりも愉快的な人物だった。というのも、彼が珍妙な仕草をして若ぶって見せたり、恋人らしく振る舞おうとしたりすること自体けっこう滑稽であった上に、パンプスを履いた例の若者がうまく企んで、老人が布製のブーツを履いた婦人に会釈しようとして前が出るたびにそのつまさを全体重をのせてふんずけ、老人が苦痛の呻き声を発すると、一同が腹を抱えて笑うといった次第なのである。

われわれがこのお祭騒ぎを心底楽しんでいたとき、けっして音楽的とは言えない甲高い声が、「あたしを誰だと思ってんだ、恥知らず！」と言うのを聞いた。われわれはどこからその声が発せられたのが確かめようと、前方に

目を凝らした。その声を発したのは、初め頭に浮かんだ布製のブーツを履いた若い婦人ではなく、明らかにそこに並べた品物の番をするため、地下室の階段の降り口に置いた椅子に腰かけているかっぶくのいい老女であることが分かった。

われわれのすぐ背後で、賑やかに演奏していた手回しオルガンの音が止んだ。それとともに、われわれが短靴や長靴を履かせていた人たちが退散した。そして、すっかり瞑想に耽っていたため、無意識のうちに三十分もこの老女の顔が無様に凝視していたらしいと気付いて、われわれもまた退散した。間もなくわれわれは、近くの「ダイアルズ」の限りなく混沌とした迷路にはまり込んでいた。

第七章

貸馬車営業所

われわれは、呼び名としていかにもぴったりする貸馬車（原語は hackney-coach であるが、地名の Hackney はロンドンの東北部にある自治区の一つで、往時は流行の中心地であった。）の営業所が、首都ロンドン特有の存在であると主張するものである。エジンバラにも貸馬車の営業所があるという話は聞く。そこまで行かなくとも、リヴァプールやマンチェスターや「その他の大都市」（議会で使う婉曲な言い回しではないが）にもそれぞれ貸馬車の営業所があるのではないかと、われわれの主張の逆をつかれるかも知れない。われわれはそうした都市に、ロンドンの貸馬車と似たり寄ったりの薄汚ない、のろのろと走るある種の乗り物があることを認めるのにやぶさかではない。しかし営業所であれ、御者であれ、馬であれ、それらの都市が首都と張り合えるものがあるといささかでも主張するなら、われわれは憤然と異を唱える。

例の鈍臭く、がたがたの古い型のロンドンの貸馬車を見て、そんなことができるとしての話だが、この地球上にそれと少しでも似ているものがあると

大胆にも主張できる人がいたら、お目にかかりたいものだ。ただ、同じ年代の別の貸馬車というのなら話は別である。われわれは最近、ある営業所で、しゃれた緑色の四輪軽装馬車と、四つの車輪が車体と同じ色に塗られているぴかぴかに磨かれた黄色の馬車を見て、憤まんやるかたない思いだった。馬車に造詣の深い人にはまったく自明のことであるが、車輪はみな違った色であるべきだし、大きさも同じであってはならないのだ。われわれが目にした馬車は奇を衒ったもので、他にも改良と誤って呼ばれるものがそうであるように、大衆のはなはだしい移り気を示すものであり、そこには由緒ある馬車に対する敬意がほとんど払われていないのである。貸馬車がなぜ清潔でなくてはならないのか？ 昔から貸馬車は汚ないものと相場が決まっているのだ。昔の人たちは、石だたみの道をがたと音を立てて一時間に四マイルの速度でゆっくりと進むことに満足していたのに、今の人たちはなぜ熱に浮かされて「動きまわろう」とし、一時間に六マイルもの速度で馬車を駆らなければならないのであろうか？ これは真剣に考慮すべき問題である。貸馬車は国法のかなめであり、立法府が制定し、議会の英知によってプレートと番号が付けられているのではなかったか。

それなのになぜ貸馬車は、辻馬車や乗合馬車に幅を利かされているのだろうか？ 議会が、のろのろと走る馬車の運賃を一マイルーリングとすべきことを厳粛に決議したのに、一マイルを八ペンスで速く走ることがどうして許されるのだろうか？ ペンを置いてその答を考えてみる——答は出そうにもないので、閑話休題とする。

われわれと貸馬車営業所との付き合いは長い。われわれはいわば歩く運賃表であり、運賃のことで悶着が起ると、自分たちの方が何だかいつも正しいという気になる。コヴェント・ガーデンから三マイル以内で水飼いを本業にしている男は、すべてひと目で分かる。そして当然、この区域で貸馬車を引く馬たちの半分が盲でもなければ、どの馬もわれわれのことはひと目で分かるだろうと信じた。われわれは貸馬車に大いに興味を持っているが、馬車を御することはめったにしない。というのも、そんなことをしようとす

れば、きまって見事にひっくり返ってしまうからである。われわれは、呼び売り商人の間で悪名高いあの有名な マーティン氏（リチャード・マーティン、1754—1834。国会議員で、1824年の英国動物愛護会の設立に重要な働きをした。）のように、馬や貸馬車などと友愛の情を結んではいるが、けっして乗ることはしない。われわれが飼っているのは馬ではなく、物干し馬（物干し台のこと）である。何よりも好きなサドルは、羊のサドル（羊の背肉のこと）である。そしてわれわれ自身の好みに従って、獵犬に従って行ったこと（馬に乗り、一群の獵犬を連れて狩りをする）もない。このように迅速に目的の場所まで走り、着いたら降りるやり方は、そうしたことの好きな人にまかせておけば良いのだ。われわれは、あくまで貸馬車の営業所の味方である。

今これを書いている部屋のすぐ軒先に（ディケンズがこの素描を書いた1835年当時、彼はホウバン通りにあるファーンヴァルズ・インに住んでいた。ホウバン通りにあった貸馬車の営業所は、現在はタクシーの駐車場になっている。）、貸馬車の営業所がある。現在は一台の馬車しかないが、それは先ほど言及した貸馬車の立派な見本である——（胆汁症にかかった浅黒い肌をした女のように）薄汚ない黄色をして、角ばった造りの大きくてどっしりとした馬車で、実に大きな窓枠に実にちっぴけなガラスがはめられている。扉のパネルには、解剖した蝙蝠のような形の色あせた紋章の飾りがあり（初期の頃の貸馬車には、貴族が乗り捨てた中古の馬車が多く使われていた。そのため、扉のパネルなどに貴族の紋章が残されているものもあった。）、車軸は赤く、大部分の車輪は緑に塗られている。御者席には、その一部をおおように一着の大外套が掛けられていて、多種多様のケープや異様な恰好の服もいくつか混ざって置かれている。そして粗布のクッションに詰められている藁が、荷物入れのすき間からのぞいている稜と競い合うかのように、ところどころから突き出ている。首をうなだれ、疲れ切った揺り木馬のように、どれもこれも貧弱ではつれたたてがみと尻尾をした馬たちが、ときたま地面を蹴ったり鞍をがたがたと鳴らしながら、湿った藁の上に辛抱強く立っている。ときおり馬の頭が、まるで御者を殺してやりたいものだと小声でささやきかけるように、仲間の耳に口を寄せる。御者自身は居酒屋にしけこんでいる。水飼人たちは寒さに凍えて、両手をポケットの奥深くに思いっきり突っ込んで、足が凍えないようにとポン

プの前で「ダブル・シャフル（片足を二度ずつ急激に引きずる踊り方。）」を踊っている。

向かいの五番地のピンク色のリボンをつけた女中が、突然表の扉を開けたかと思うと、いきなり四人の小さな子供たちが飛び出して来て、力いっぱい声を張り上げて「馬車あ！」と叫ぶ。水飼い人はポンプからさっと離れ、それぞれの馬の手綱をつかみ、馬と馬車とを引っぱって、声を限りに、と言うよりは、深い呻くような低音の持ち主なので、思い切り低音でしきりに御者を呼びながら居酒屋に向かう。酒場からそれに応じる声が聞こえる。木底の靴を履いた御者が走って道を渡ると、通りにこだまが起こる。それから、馬車の扉を呼ばれた家の向かいあわせにつけようと、苦労して前進したり、後退したり、溝をきしらせたりの騒ぎとなり、子供たちは有頂点になって喜ぶ。てんやわんやの大騒ぎだ。一カ月ばかりその家に滞在していた老婦人が、田舎に帰ろうとしているのである。次から次へと箱が運び出されて、馬車の片側はあつという間に荷物でいっぱいになる。子供たちはいたるところで邪魔立てをし、こうもり傘を運ぼうとして転んだいちばん小さな子供がけがをして、足をばたつかせながら運び去られる。子供たちの姿が消え小休止が起こるが、その間きつと老婦人は、奥の居間で一同にお別れの接吻をしているのだ。やがて嫁いだ娘、すべての子供たち、そして両家の召使いに付き添われて老婦人が現れる。召使いたちは、御者と水飼い人との協力を得て、老婦人を何とか無事に馬車に乗り込ませる。袖なし外套と、黒い小びんそれに紙に包んだサンドイッチが間違いなく入っているはずの小さな籠が手渡される。踏み段がさつと上がり、扉がぱたんと閉まる。「チャリング・クロス（現在のトラファルガー広場のネルソン記念柱のあたりに建てられていた、ロンドンでは主要な馬宿の一つであったが、トラファルガー広場を造るために、1832年それよりも少し北側、ノーサンバランド・ハウスの向かいに建てかえられた。）」だ、トム」と水飼い人が叫ぶ。「さよーなら、おばあちゃん」と子供たちが叫び、一時間三マイルの速度でちりんちりん和鈴を鳴らして馬車が進む。母親と子供たちは家に引っ込むが、ただ一人わんぱく坊主が全速力で通りを駆け出し、それを女中が追いかける。女中にしてみれば、自分の魅力を見せびらかせる絶好の機会であり、それが面白くないわけではない。女中はわんぱく坊主を連れもどし、わ

れわれに向けてかそれとも居酒屋のボーイに向けてか（どちらとも言えないが）、二、三度通りの向かいに優しい視線を投げかけて扉を閉める。そして、貸馬車の営業所にふたたび静寂がもどる。

われわれは、馬車を呼びにやられる「雑働きの女中」が実に嬉しそうに馬車の中に身を置いてみたり、同じ用向きで使いに出された少年たちが、御者台にのぼってすっかり悦に入っているのをしばしば楽しく眺めてきた。しかし、これまででいちばん楽しかったのは、先日の早朝、トッテナム・コート通りで見た貸馬車の一行であった。それは婚礼帰りの一行で、フィツロイ広場（1790年から94年頃にかけて、アダム兄弟によって設計された立派な広場で、芸術家や文士が多く住んでいたが、世のあぶれ者たちが住みつくようになって、徐々にうらぶれて）付近の裏通りの一つから現れた。一行は、白の薄い衣裳に身を包んだ大きな赤ら顔をした花嫁、そしてもちろん、花嫁と同じく婚礼にふさわしい衣裳をつけた、ずんぐりむっくりの陽気な付き添い婦、それに青いコート、黄色のチョッキ、白のズボンそして服装によく釣り合った毛糸編みの手袋といったいでたちの花婿に、花婿の親友であった。彼らは通りの角で立ち止まり、何とも言えないほどもったいぶった態度で貸馬車を呼んだ。一行が馬車に乗り込むとすぐ付き添いの女が、明らかに通行人の目を欺いて自家用馬車であると思わせるために、わざわざ持って来たと思われる赤いショールを、馬車の扉の番号（貸馬車の登録番号は車の後部の公式のプレートについているもので、扉の番号は貸馬車の経営者が台数に応じてつける私的な馬車番号）の上に何気なく垂らし掛けた。彼らはそのごまかしが功を奏したと信じて、すっかり満足して去って行った。しかし、生徒の使う石板ほどもあるプレートに書かれた目にもあざやかな大きな番号が、馬車の後部に突き出ているのは御存知ないのである。一マイルーシリングでは安すぎる！——彼らにとっては、少なくとも一マイル五シリングほどの値打ちはある馬車だった。

もし貸馬車に、たくさんの乗客を運ぶ身体に負けないくらいの頭があれば、それはすこぶる面白い書物を生み出してくれることであろう。使い古されて落ち目になった貸馬車の自叙伝は、きっと使い古された（原語の hackney には動詞の意味として「使い古す」、「陳腐にする」の意がある）落ち目の劇作家の自叙伝と同じように、貸馬車の hackney にひっかけている。

に面白いであろう。ながえとともに旅をした貸馬車の物語は、極地を探険した劇作家の話に比べても遜色はあるまい。仕事や金儲けのために——快樂や苦しみ事のために貸馬車が運んださまざまな人たちの物語は語り尽きせぬものがある。また時の経過とともに変化を見せていく人たちの悲しい物語も数知れないことだろう。田舎の娘——けばけばしく着飾った女——のんだくれの売春婦！ あどけない丁稚——放とうな道楽者——窃盗！

辻馬車もまんざらではない。あの世に行くかこの世にとどまるか、生死をかけた危険な旅をするのであれば、辻馬車は恰好の乗り物である。しかし辻馬車には、貸馬車を類いまれなものにしているあの重厚な動きが見られない上に、それがほんの最近現れたばかりの乗り物で、過去に立派な先祖を持っていないことを銘記すべきである。貸辻馬車と言ってみても、辻馬車は辻馬車なのである。それに対して貸馬車は、過去の上流社会が遣したものであり、その慣習の犠牲車なのである。それは、かつてイギリスの名門貴族のもとに侍り、その紋章をつけている。往時は、お仕着せを着た召使いに付き添われたこともあったが、今では美しい装飾品もはぎ取られ、若い頃はりゅうとしていても年老いて役立たずになる従僕のように世にほうり出され、四輪馬車の衰退の階段を一步一步下って行って、やがてその行き止まり——営業所へと辿り着くのである。